

## 加藤友三郎とその時代の海軍—人物論の視点から—

横山久幸

### 【問題認識】

加藤友三郎は、連合艦隊参謀長として東郷平八郎とともに日本海海戦を勝利に導いた人物として知られている。また日露戦争後の海軍軍備拡張を強力に推進し軍政面においてもその優れた手腕が大いに評価されている。このため山本権兵衛、東郷平八郎とならび「日本海軍の三祖」といわれているが、彼の残した業績の大きさを顧慮すれば、他の二人よりも語られことが少ないといえよう。友三郎は八八艦隊建設を推進することによって日露戦争型の海軍軍備をポスト・ユトランド型のそれに脱皮させ、海軍の近代化を目指していた。しかし、ワシントン軍縮において八八艦隊構想を自ら葬り去ることとなった。そこでまず、友三郎が生きた時代における海軍との関わりから、彼の人物像を浮き彫りすることを試みる。次に、なぜワシントン軍縮会議において軍備制限に応じ国際協調を推進したのか。そこにある海相としての友三郎の国防観(対米戦略)は如何なるものであったかを探りたい。

### 1 加藤友三郎が生きた時代背景

- ・ 友三郎が生きた時代は、日本が東アジア秩序から脱し西欧国際秩序を受け入れて近代国家建設に邁進した時代であり、日清・日露の戦争を経て近代国家の基礎を確立し第一次世界大戦によって五大国として東アジアにおけるリージョナル・パワー(Regional Power)としての地位を確立した時期にあたる。
- ・ 海軍は、兵制をイギリス式とし島国の国防の要としての認識をもって軍備充実に努めていった。特に山本権兵衛が明治24年に海軍大臣官房主事になって以降、いわゆる六六艦隊建設による拡張に努め、海軍はこの戦力で日露戦争に臨んだ。
- ・ 日露戦争後の明治40年4月に国防方針が制定され南北併進の国家戦略のもと、海軍は海主陸従の国防思想をもって米国を軍備標準国として八八艦隊を建設することになった。友三郎は海相として、大正9年度予算でこの八八艦隊完成案を成立させてワシントン軍縮に臨んだ。
- ・ ワシントン会議前の日米英の建艦競争の状況及び会議の概要に関しては後述する。

### 2 加藤友三郎の生い立ちと出来事(『元帥加藤友三郎傳』、以降、『友三郎傳』)

- ・ 友三郎は、広島藩士で儒学者の加藤七郎兵衛の三男(三男三女)として生まれる。父は学問所(後の修道館)の助教授であった。
- ・ 母の竹は、安藝藩士山田愛藏の次女で「膽力人に優れ、武術の心得もありて男勝りの女丈夫」といわれていた。
- ・ 父が江戸で客死した時に友三郎はまだ3歳であり、17歳違う長兄の種之助の薫陶を多く受けることになった。長兄は「豪邁にして血気壯なる」人であり、戊辰戦争では神機

隊にあって上野の彰義隊と戦闘するなど、この戦争で軍功を重ね明治4年に陸軍中尉となった。

- ・ 長兄は友三郎が10歳の時、ある夜「年上の甥某と共に暗く淋しき道を各々異なる方面より単身迂回せしめ」て胆力を競わせる肝試しを行い、12歳達すると友三郎を伴って上京し築地本願寺の寺中に仮偶して英語・数学・漢学などを学ばせたりした。
- ・ 任官以降の経歴については以降の述べる項目に関連して触れる。

### 3 友三郎の性行（『友三郎傳』）

・ 友三郎は幼少の頃、『ひいから 癩癩持ちのこと の友公』と綽名されて、近所の悪たれどもを畏怖せしめた。友さんが一度ムカッ腹を立てたが最後、小禄ながら武士の習はしとばかり、直ぐ腰の太刀を引っこ抜いて、荒つばい振る舞いに及んだ云々」という追憶談がある。長姉は友三郎が内閣を組閣した際に「アノ潔癖のイタヅラものの友がそんなお国の御用に立つ・・・小さい時から潔癖なきかぬ気の子で喧嘩早くて何時も私共へ弟の喧嘩の尻を持ち込まれ・・・」と回顧していた。友三郎の性格に関して海軍の先輩達は、東郷平八郎が「終始一誠意」と、齋藤実が「君寡黙謹厳にして公正無私、頭脳明敏にして思慮周密、而かも果敢決行毫も踟躕せず、恪勤精励は以て範とするに足る」と『友三郎傳』の序に記している。

・ 友三郎は孝心が篤く腕白時代であっても母親の訓戒だけはよく守り違背することがなかった。長じては母を東京に迎えて長兄とともに孝養を尽くしたという。また、父のごとく敬い親しんでいた長兄が31歳の時に亡なり、「非常ノ落胆デアツタガ、ソレ以来性格ニモ変化ヲ来シタヨウニ思ハレ、又建康モソノ時カラ悪クナツタヨウニ思ハレタ」と齋藤実は回想している。

・ 「謹厳にして端正公平、思慮頗る周密にして所謂石橋を叩いて渡る用心家」であるが、「所信は百難を排しても断行する鉄の如き意思の所有者なり」。また「難局に直面して苦心容易ならざる場合にても未だ曾て人に屈託の色を示したることなし」という剛情我慢の人であった。

・ 友三郎が職責を重んじ恪勤精励していたことから、政治上反対の立場の者も彼の死を惜しんだ。齋藤実は談話のなかで、軍務局長の時も次官の時も「非常ノ勤勉家デ其ノ日ノ事ハ必ズ其ノ日ニ片付ケルト言フヤリ方」と友三郎の精勤ぶりに感嘆していた。また、頭脳明晰「判断力の俊敏なること他に多く比を見ざる所」であって、人の言説に関してじつと傾聴しているが、話が半ばになる前に「既に結論を推知し、早くも其の当否に就て考慮するを例としたりき」という。原首相も「加藤と云う人は外交調査会に在ても決して議論もせず意見も無闇に述べないが、最後にいつも肯綮に当たった結論をつける油断のない人」といつていた。

・ 友三郎は常に沈着で少しも喜怒を出さず、どのような過誤失策であっても叱責面罵するようなことはなかったという。大角三郎は副官時代のことについて「元帥が人を叱つた

り小言を言つたりしたことは絶えて聞かぬ・・・(角力見物にいて留守中に軍艦筑波の爆沈があつて、帰宅してこの事を知り海軍省に出向くと海相が一人で多忙を極めていた)・・・何処に往つていたかと聞かれ角力見物に往つていたと答えると新聞記者なぞがアチラで多勢待つて居るといわれただけ」だったという。

・ 寡言、喜怒を色に出さず極度に表情に乏しいところから冷血にして情味がないという人もいたが、人に倍して情宜に厚く血あり涙ある人であった。第2艦隊参謀長であった時、旅順閉塞隊の要員選考に漏れた出雲の一機関兵が伊地知艦長に再考を直談判しても聞き入れてもらえなかった。この様子を傍らで聞いていた友三郎は、その兵が退出したかと思うと「互い未だ一語を発せざる内に忽ち声を放つて泣き出した」と伊地知が回想していた。

・ 友三郎は島村速雄とともに酒豪の双璧と言われた。酒量が多くなると島村は酔態を示したが、友三郎は終始状態が変わらなかった。出雲艦長の伊地知は晩食に必ず酒を命じ、友三郎と痛飲していたが、戦争中は一合とお互い約束したものの守られることがなかったという。また海軍省勤務では朝からコップ酒を飲みながら仕事をし、ワシントン滞在中はウィスキーを多く飲用した。タバコも酒に次ぐ好物で葉巻を多く用いたという。

・ 勝負事を嫌いビリヤードや将棋の趣味がなかったが、囲碁だけは多少興味を持ち晩年は新聞等を熱心に見ていた。最大の趣味は漫画であり、新聞等の漫画を切り抜き、時に風刺の巧拙を家人に評したりしたという。

#### 4 海軍軍人としての行動と思想

##### (1) 砲術家としての日清・日露戦争

・ 友三郎は、明治13年12月に海軍少尉補に任ぜられて海軍士官としての生活が始まった。友三郎は殊に砲術に長じていたことから、17年10月に撰津砲術掛、明治19年2月に海兵砲術教授心得兼生徒分隊士心得、12月に砲術教授となり、海軍大学校を経て明治22年に高千穂砲術長となった。

・ 日清戦争では吉野砲術長として勲功を挙げた。豊島沖海戦では、敵艦濟遠の大砲の旋回を看破して先制を制して初弾を敵艦に命中させる「果断(直観)」を発揮した。黄海海戦では、吉野は坪井航三少将率いる第一遊撃隊の単縦陣の先頭艦であり、友三郎は敵艦の斉射のなか最適な射距離を狙って接近し急速射撃を行う「沈勇」を発揮して北洋艦隊に集中砲火を浴びせた。

・ 日露戦争では、第2艦隊参謀長、続いて第1艦隊参謀長兼連合艦隊参謀長として日本海海戦に臨んだ。日本海海戦では、バルチック艦隊との距離が8千メートルであることを三笠の安保清種砲術長が告げると、「東郷長官ノ眼ト加藤参謀長ノ眼トガ期セズシテ相會シ、互ニ何カウナヅカレタカト見エタ其ノ刹那ニ参謀長ノ甲高イ聲ガ突如トシテ響イタ『艦長取舵一杯!』」と命じ、そしておもむろに東郷長官に「取舵ニ致シマシタ」と報告したという(「海戦ノ勝敗ト主将」安保清種)。友三郎はまさに果断決行の人で機を見るに敏であった。東郷は敵前大回頭のタイミングに関し友三郎の戦術眼を絶対的に信頼していたといえ

る。

- ・ 日清・日露の海戦は、古来の衝角戦法から砲戦によって敵の軍艦を撃沈することが可能であることを証明した戦いであり、砲術の技量に優れた友三郎はこの海戦の変革期をリードした人物と捉えることができる。

## (2) 海相としての八八艦隊の建設

- ・ 友三郎は、日本海海戦の後、海軍次官、呉鎮守府長官を経て大正4年8月に八代六郎の後を受けて第二次大隈内閣の海相に就任した。以降、自身の内閣での兼任を含め5代の内閣で7年10ヶ月にわたって海相を務めた。

- ・ 八代は海兵8期で友三郎の後輩にあたり、海軍の汚職事件として有名なシーメンス事件により山本権兵衛内閣が総辞職し、その後を受けて成立した大隈内閣（大正3年4月）の海相に就任した。彼は海軍粛清の世論を受けて山本や齋藤実を予備役にするなどの改革を断行した。彼の思想的特徴は、日本海から東及び南シナ海の海域を自国の湖のように自由に行動できるよう中国の協力を取り付け、日露戦争以前にあっては対露戦を、戦後にあっては米国の攻勢に備えるという、いわゆる「東・南シナ海の湖水化戦略構想」をもっていったことである。この構想は日露戦争後の福建省不割譲条約に関連したもので、台湾海峡の重要性から三都澳一帯（羅源湾を含む）と厦門湾一帯を租借する必要があるとする考えに基づくものであった（「三都澳租借等ノ件ニ関スル覚書」大正3年5月22日）。

- ・ その八代の後を受けた友三郎の登場は、薩摩閥とされた山本や齋藤の失脚によって海軍における薩摩閥が終焉したことを明確に示したものであった。

- ・ 海軍の軍備拡張は、日清戦争では四六艦隊、日露戦争では六六艦隊となり、海相が山本から八代に引き継がれる頃には八八艦隊構想が練り上げられていた。その計画の始まりとされる八四艦隊計画が確立したのが大正3年であり、その予算の国会通過が大正6年、続く八六艦隊の予算成立が大正7年、八八艦隊の予算成立が大正9年であった。これら矢継ぎ早の拡張計画の成立には、第1次大戦の大戦景気が背景にあったものの、友三郎の議会での説得力のある説明が大きく作用した。

- ・ 八四艦隊建設については、ユトランド沖海戦で軍艦が不足していた英国が巡洋戦艦の派遣を求めてきた。この時、友三郎は寺内首相や閣僚に巡洋戦艦の威力と建造年月に長期を要すなどを説明して、巡洋戦艦天城と赤城建造の承認を取り付けている。まさに機を見るに敏といえよう。

- ・ 八六艦隊計画では、軍備充実に関する請議を寺内首相に提出し議会の協賛を得て通過させている（大正7年3月）（『海軍軍備沿革』）。その請議のなかで「富力ノ懸隔多大ナル帝国ハ数字ヲ以テ拮抗スルノ不可能ナルコト固ヨリ言フ俟タス」であり、想定敵国の米国に抗して「東亜海面ノ管制ヲ完全」とするためには八八艦隊でもなお不十分であるとしながらも、この消極的軍備であっても必ず次の条件を保障しなければ到底国防の実を挙げることはできないうとしていた。

- (イ) 本土ノ防衛
- (ロ) 本土ト対岸大陸トノ連絡保持
- (ハ) 南支那海の保安

そして「不幸ニシテ晨ニ台湾琉球ヲ奪ハレタニ樺太千島ヲ失ヒ而カモ是等ノ離島カ敵手ニ反用セラレテ彼ノ前進根拠地トナリ・・・沿岸ハ最早ヤ敵軍ニ対スル防衛戦タルヲ得ス」と述べている。消極的軍備を補うための前縁根拠地の確保という国防思想がワシントン会議における駆け引きに反映されることになる。

- ・ 一方、八八艦隊の総予算は、大正9年の物価で16億円を上回る巨額に達し、翌年には国家予算に占める比率が3割を超え、国民も目をみはるほどであった。このため友三郎は、艦隊計画の要である陸奥、長門の建造が承認された時、浮かれる部内の空気を「議案成立と財政上の実現性とは全く個別のもの」といって厳しく戒めている。
- ・ 八八艦隊完成後の艦隊維持費と代艦建造のための建造費を予測することは容易であり、彼の炯眼をもってすれば、いずれその計画が財政的に破綻することを容易に想像し得たと思われる。そして国力に見合う程度の艦隊を漸進的に整備する道を彼であれば選択しえたと思われるが、何故、これほどまでに力を傾けたのか疑問が残るところである。

### (3) 主席全権としてのワシントン会議

#### ・ 軍縮会議の背景

1920年代末から米英日三国を中心とする激しい建艦競争が展開され、アメリカは1916年法（ダニエルズ・プラン）で弩級戦艦10隻、巡洋戦艦6隻を基幹とする156隻81万3000屯を1919（大正8）年までに建造することを、イギリスは日米の拡張計画に対し21（大正10）年に巡洋戦艦4隻建造を計画していた。

三ヶ国の軍事費：1919～1922年間平均

	日 本	アメリカ	イギリス
対歳出	43.54%	23.00%	22.6%
対国民所得	7.72%	2.26%	3.3%

#### ・ 会議の招聘

米国は、日英仏伊4国に対し軍備制限と太平洋・極東問題討議のための会議を提案してきた。日本は、軍縮会議への参加に同意するも太平洋・極東を議題とすることは回避したい意向であった。しかし、英米が二つの問題は不可分として重視していたことから、日本は誤解と反感を受けることを避けるため議題に加えることに同意することとした。

日本の全権は加藤友三郎海相、徳川家達貴族院議長、幣原喜重郎駐米大使（後、埴原正直外務次官）

米国はヒューズ国务長官、イギリスはバルフォア枢相、フランスはブリアン首相

- ・ 会議の冒頭、ヒューズは主力艦の破棄量と保有量を示した爆弾提案を行った。すなわ

ち英米日の主力艦比率を 10 : 10 : 6 とすること。

・ 友三郎はヒューズの提案に対して、「日本ハ米国案ノ高遠ナ目的ニ感動シ、主義ニオイトテ欣然トコノ提案ヲ受諾スル。自ラノ軍備ニ大削減ヲ加ヘル用意アリ」（井出讓治海軍次官に宛てた「加藤全権伝言」：加藤寛治陪席のもと堀悌吉に口述筆記させたもの）として協議に応じる姿勢を示した。

・ 協議は海軍専門委員会に移され、日本側委員は対米英 7 割の兵力が国防上絶対必要であることを主張して平行線をたどった。このため日米英の全権間の折衝に移ることになった。軍縮問題をリードしたのは友三郎、ヒューズ、バルフォアの三全権であり、全権の非公式会談で決定されたことが総会にかけられた。この問題では各種委員会が 69 回開かれ、大正 11 年 2 月 1 日の第 5 回総会で可決された。

・ 三全権の話し合いでは、友三郎が破棄の対象となった陸奥の復活とグアム、フィリピンの米軍基地の不拡大を提案し（大正 10 年 12 月 12 日）、この修正をもって対米 7 割堅持の海軍内の強硬な主張を押さえ、かつ前縁根拠地の不安を解消して主力艦対米英 6 割を受諾した。

・ 友三郎を「残蠟」と揶揄した外国人記者も、「危機の会場を絶えず照らす偉大なるうそく」と評するようになった。また、巧みな英語で「世界平和のためとはいいいながら、お互いに飯のくいあげは閉口だ」などといった軽口が休憩時に飛び出し、外国代表団の狼狽と爆笑を誘ったという。しかし帰国後「このままワシントンで死に果てるのではないかと思った」と述懐したほどの心労であった。

・ 条約において規定された主要なものは次のとおり。（『海軍軍備沿革』）

① 締約国の保有し得る主力艦及び代換主力艦（第 4 条）（条約締結時の保有量）

英	20 隻	55 万 8950 吨	52 万 5000 吨	*新艦 2 隻含まず。
米	18 隻	52 万 5850 吨	52 万 5000 吨	*新艦 2 隻含まず。
日	10 隻	31 万 5000 吨	31 万 5000 吨	
仏	10 隻	22 万 1170 吨	17 万 5000 吨	（メートル式）
伊	10 隻	18 万 2800 吨	17 万 5000 吨	（メートル式）

② 主力艦は艦齢 20 年をもって代換、1 隻の基準排水量は 3 万 5000 吨を限度として、備砲は口径 16 吋を以内とする。主力艦とは将来建造する艦に限り基準排水量 1 万屯を超え、口径 8 吋を超える砲を装備するものにして空母でないもの。

③ 空母は、英米 13 万 5000 吨、日 8 万 1000 吨、仏伊 6 万屯、1 隻の屯数は 2 万 7000 吨を限度とする。

④ 主力艦及び空母以外の軍艦の基準排水量屯数は 1 万屯を、備砲は口径 8 吋を超えないこと。

・ 軍事費の削減効果

日本：以後 4 年間に經常部（維持的経費）7,800 万、臨時部（新設整備など）4 億 9000 万円を削減

アメリカ：10億1917万（21年度）から5億3693万（22年）、  
3億7816万ドル（23年）を削減

イギリス：年額1500～2000万ポンドを削減

・ 友三郎は、伝言のなかで「我日本ヲ考フルニ我八八艦隊ハ大正十六年ニ完成ス 而シテ米国ノ三年計画ハ大正十三年に完成ス 英国は別問題トスヘシ其ノ大正十三年ヨリ十六年ニ至ル三年間ニ日本ハ新艦建造ヲ継続スルニモ拘ラズ米国ガ何等新計画ヲ為サスシテ日本ノ新艦建造ヲ傍観スルモノニ非サルヘク必ス更ニ新計画ヲ立ツコトナルヘシ（中略）日本ハ八八艦隊計画スラ之カ遂行ニ財政上ノ大困難ヲ感スル際ニ方リ米国ガ如何ニ拡張スルモ之如何トモスルコト能ハズ」といい、さらに「米国提案ノ所謂10・10・6ハ不満足ナルモ But if 此ノ軍備制限案完成セサル場合ヲ想像スレバ寧ロ10・10・6デ我慢スルヲ結果ニ於テ得策トスヘカラスヤ」言っている。すなわちこの会議が決裂した場合に生起する軍拡競争を正しく認識し、むしろ主力艦対米6割を固定する、すなわち米海軍の軍備拡張を制限することを狙ったものといえる。

・ このことは、貴族院予算総会（1922.3.15）での友三郎の答弁に現れている。

「国防のことは、数字をもって断定的にこれより一步退いても国防上に責任をもてない（中略）ものではない。（中略）ある程度までの譲歩をなすとも、この会議をまとめる方が、帝国としては利益であるという考えをもって、最後にこの六割をみとめたのである」

・ 米海軍の軍備を制限するとした友三郎の深慮が如何に日米の国力差を見抜いた判断であったかは、海軍が昭和12年度からの③計画を開始したことによって、それ以降に米国と展開された軍拡競争によって証明されることになった。

#### 4 加藤の決断とその国防観

・ 友三郎が外相であれば「外交手段ニ依リ戦争ヲ避クルコト」は当然であるが、海相であることから、対米6割による対米海軍戦略を如何に考えたいたのかが問題となろう。

・ ワシントン軍縮の結果により日本は国防方針を改定（大正12年）して仮想敵国を米露中の順とし、対米戦において開戦劈頭ルソン島のほかグアム島も攻略、決戦線を南西諸島から小笠原諸島へ、前哨線を小笠原から南洋委任統治諸島へ進めた。このための海軍所要兵力は戦艦10、重巡（一等巡洋艦）12、航空12隊を基幹とし、これまでの邀撃作戦に「漸減」を取り入れて重巡と潜水艦の増勢に努めることになった。しかし邀撃漸減作戦の検討に、友三郎は時期的に関わっていなかったと思われる。

・ 前出の「加藤全権伝言」では、「斯克考フレバ国力ニ相応スル武力ヲ整フルト同時ニ国力ヲ涵養シ一方外交手段ニ依リ戦争ヲ避クルコトガ目下ノ時勢ニ於テ国防ノ本義ナリト信ズ 即チ国防ハ軍人ノ専有物ニ在ラス」と言っている。国力に相応しい軍備整備と総力戦に備えた国力の充実が友三郎の国防観の根本と見ることができる。

・ グアムとフィリピン両軍港の不拡大の要求は、米海軍のみではフィリピンの防衛が困難となり、日本は西太平洋・極東において軍事的優位となることを狙ったものであり、友

三郎の対米作戦は、国防方針のフィリピン攻略から始まる対米迎撃作戦を否定して防衛作戦に徹する、先の請議にあった「東亜海面の管制」を主眼とした対米海軍戦略、八代の「東・南シナ海の湖水化」よりもより防衛的な戦略を思い描いていたのではないと思われる。

・ それは友三郎と八代の中国観の違いによるものであろう。友三郎は八代のように中国の協力に期待することはなかった。海相在任中の大正7年5月に陸軍と同じく中国との間に第1次大戦への参戦を想定した「日中海軍共同防敵軍事協定」を締結している。しかし、ワシントン会議における海軍随員の人選に関し、海軍省当局は当時中国の事情に最も精通している八角三郎を加えることに決し、友三郎に決済を仰いだ。しかし友三郎は「ソレニ及バヌ」と同意しなかったことから、海軍当局は再考を促したが、「支那ノ事ハ予モ多年閣議ニ於テ相当ニ聞イテ知テ居ルガ、幾ラ聞イテモ判ラヌノハ支那デアル、併シ此ノ判ラヌト云フコトガ即チ善ク判ツテ居ルノダ」といって拒否したという。友三郎は自らが不可と信じるころは仮借なく反対したが、理ありと考えるときは議することなく同意したということから、随員の人選も海相を通じた経験から得た中国観に基づくものであろう。

まとめ

・ 友三郎は明晰緻密な頭脳、卓越した先見達識、周到な用意と大胆な決断をもって、日本海軍を英米に次ぐ近代海軍に育てていった名将である。しかし、反面必ずしも創意の人ではなかったことは、敵前大回頭が東郷の得意な作戦であったことや、八八艦隊が八代の創意を引き継いだものであり、軍縮もヒューズの提案を逆手にとって新しい近代海軍の姿を示したものであったことから伺える。しかし、友三郎は受け身のさりげない姿勢の中に、みずからの真骨頂を打ち出す達人であったとの評価もある（吉田満）。

・ また「伝言」では、「今回ノ軍備制限ハ永久的ノモノト思ウテ安心スルコトアルヘカラス」と言っているが、これは米国との国力差を念頭に、おそらく不測の事態に備えて国力を早期に増進・充実することを示唆したものであろう。しかし、軍縮の条件、特に対米6割は屈辱的譲歩であるとして朝野にわたって不評であった。なかでも海軍の条約反対派は、米国の軍拡を抑えることを目論んだ友三郎の深慮を理解できず、対米6割によって米国に抑え込まれているとの不満を強く抱くことになっていった。このことが主力艦の軍縮とは裏腹に補助艦の軍拡に力を注ぎ、さらには無条約時代を迎えることになったといえる。

・ 友三郎は、山梨勝之進を先に帰国させて東郷平八郎にワシントンでの事情を説明させて事前に了解を得ていた。この時、東郷は「たとえ軍備に制限は加えられても、訓練に制限はあるまい」（新井達夫）と言ったという。精神的訓戒として東郷らしいが、その後の海軍の峻厳な訓練を示唆しているようである。

・ 昭和11年の海軍記念日における講演資料として海軍が配布した冊子のなかの「軍縮会議の経過概要」には、「華府条約に依る米国の収穫」として次のような記述がある。

各国軍事専門家其の他の総合所論に依れば、華府会議に於て米国の獲たる所は、

① 自国に於ける最少の犠牲及努力を以て、条約に依り他国の建艦を制限し世界一海



軍樹立の目的を達した。

- ② 自国に於て大困難を予想されたる建艦計画を中止する事が出来た。
- ③ 米国の感ずる危険国（日本）を劣勢比率に圧伏し東洋発展の保障を確立する事が出来た。

即ち、平和と軍備制限と云う美名の下に、米国は居ながらにして世界一海軍国となり世界最強の地位を占むるに至った。

- ・ ワシントン会議の軍備制限受諾によって、友三郎の意に反して海軍内の派閥対立と米国への対抗意識の先鋭化を醸成することになった。

#### 【参考文献】

- ・ 加藤元帥伝記編纂委員会『元帥加藤友三郎傳』日東印刷、1928年。
- ・ 小笠原長生『鐵櫻隨筆』実業之日本社、1926年。
- ・ 近世名将言行録刊行会編『近世名将言行録 4巻』吉川弘文館、1935年。
- ・ 原奎一郎編『原敬日記（第9巻）』乾元社、1950年。
- ・ 新井達夫『三代宰相列伝 加藤友三郎』時事通信社、1958年。
- ・ 吉田満「加藤友三郎と八八艦隊」『近代日本を創った百人』毎日新聞、1965年
- ・ 松下芳男『日本軍閥の興亡2』人物往来社、1967年。